



TITLE:

一般労働組合の成立過程 - ロンドン・ドック・ストライキ(一八八九年)を中心にして -

AUTHOR(S):

前川, 嘉一

CITATION:

前川, 嘉一. 一般労働組合の成立過程 - ロンドン・ドック・ストライキ(一八八九年)を中心にして -. 経済論叢 1957, 79(1): 43-67

ISSUE DATE:

1957-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/132515>

RIGHT:

經濟論叢

第七十九卷 第一號

經濟政策学の方法論……………	豊崎稔	1
ケインズにおける投資概念の解体……………	吉村達次	21
一般労働組合の成立過程……………	前川嘉一	43
——ロンドン・ドック・ストライキ（一八八九年）を中心として——		
個人と組織……………	降旗武彦	68
——ハーバードの The Functions of the Executive の 検討を中心として——		
社会主義計画化と国民經濟バランス……………	高昇孝	90
生産的労働と交通労働……………	崎山一雄	108
堀経夫博士還暦記念論文集		
「古典派経済学の研究」をよんで……………	出口勇蔵	128

昭和三十二年一月

京都大學經濟學會

一般労働組合の成立過程

—— ロンドン・ドック・ストライキ（一八八九年）を中心にして ——

前 川 嘉 一

イギリスの労働組合組織を類型化して考える場合、職能別（craft）、産業別（industrial）、一般（general）の三つに分けるのが一般的になっている。¹⁾労働組合組織は資本主義の発展に照応して、すなわち、産業資本期における支配的形態としての職能別組合から、独占資本期に対応した産業別組合へ発展する。その転形過程にあって、この両者の組合組織を補足し、且つ、過渡的なものとしてではなくて、現在においても、それ自体有力な相対的独自性をもつものとして、一般労働組合（General Labour Union）の存在価値は十分注目し値いするものである。²⁾一般労働組合は、職能別組合が職能に、産業別組合が産業にもとづいて組織しているのに対し、これら職能、産業にもとづかず、広汎な諸職業の、主として未熟練労働者によって構成されている組織である。³⁾

もとより一般労働組合の組織化も資本制生産の発展過程との関連の上に理解されなければならない。一般労働組合の形成はどのようにそれと関わりあうのか。一般労働組合成立の諸条件はどのようなものであるか。成立当初の

一般労働組合の性格をどのように考えるか。これらの点をなにごとか明かにしたい。

周知のとおり、現在、一般労働組合の代表的なものは運輸・一般労働組合と一般都市労働者組合であり、何れも第一次大戦後合同によって結成をみたものである。すなわち、資本主義の一般的危機の段階において、資本主義諸国における生産設備の慢性的過剰、一方における就業労働者の労働能率の増大、これに起因する生産的労働者の絶対的減少、熟練労働者の特権喪失、特に慢性的大衆失業の存在を背景にして組合組織化がみられた。しかし、この段階における一般労働組合の形成は、既存一般労働組合を中核としての合同によるものであって、一般労働者組織の戦線整備・強化が実質的内容である。したがって、一般労働組合の成立は、当時既存の一般労働組合の成立にさかのぼって考察する必要がある。それ故「それら組合の全史は『新組合主義』(New Unionism)の時期にまで遡ってたどらなければならない」。『新組合主義』が一般労働諸組合の結成へ導いた」と論じているのは当然である。なぜなら、運輸・一般労働組合の前身「ドック・波止場・河岸および一般労働者組合」(the Dock, Wharf, Riverside and General Workers' Unions)・一般都市労働者組合の前身「全国ガス労働者および一般労働者組合」(the National Union of Gasworkers and General Labourers of Great Britain and Ireland)・何れもが一八八九年に相前後して成立をみたからである。もとより一般組合は、すでに一八三〇年代に成立したことはあったが、これは全く一時的なものにすぎなかった。ここでは旧組合主義後の新組合主義の一環として成立した一般労働組合をとりあげたい。そして「ドック・波止場・河岸および一般労働者組合」の成立過程という具体的事例にもとづいて、一般組合成立についての前述の課題を説明しようと思う。

「ドック・波止場・河岸および一般労働者組合」成立の過程は、いわゆるロンドン・ドック・ストライキ(一八

八九年)の過程で形成された故にストライキそのものを明かにしなければならない。このロンドン・大ストライキのイギリス労働組合運動における地位は極めて重要であつて、視角を異にしたがつて、あるいはこれをチャームズム(Charlism Movement)に比肩し、あるいは一八三四年全国組合大連合(Grand National Consolidated Trades Union)に、あるいは一八五一年の合同機械工組合(Amalgamated Society of Engineers)の結成に對比して考えられているが、何れにおいても、争議直後の商務局報告の評価「イギリス史に於て殆んど比較するものない労働運動」を否定するどころか、その上に立つものとみてよいであらう。このイギリス労働組合史において「転換点」としての意味をもつドック・ストライキを明確にすることによつて、一般労働組合の成立を明かにしようと思う。したがつて、ロンドン・ドック・ストライキを、一般労働組合成立という視角に重点をおいて考察することにした。

註(1) Henry Collins, Trade Unions Today, (1950), p.103.

(2) 現在、一般組合の全イギリス労働組合に占める比率は次のようになる。

一九五二年労働組合員数(単位千人)

	男子	女子	計
一般組合	一、八三七	三、一〇	二、一四七
	(二二・八%)	(一七・四%)	(二二・六%)
総組合員数	七、七〇五	一、七七四	九、四八〇

(G. D. H. Cole, An introduction to Trade Unionism, p.285.より算出)。

なお、一九五二年労働組合会議(T. U. C. C.)によつて「二大一般組合(Transport and General Workers' Union, members 1, 285, General and Municipal Workers' Union, memberships 808, in Thousands)は八〇二万票のうち二〇九・三万票、すなわち四分一以上を掌握している」。(G. D. H. Cole, op. cit., p.237.)

- (3) 一般労働組合については「フランダーズは「職能にも、産業にもとづくのではなくて広汎な諸職業にわたる十分巾広い労働組合組織を」と規定」(Allen Flanders, *Trade Unions*, p.34)。⁷ ホールは「ある産業乃至広汎な諸産業の未熟練労働者を加せしむ」と規定しつつは(G. D. H. Cole, *op. cit.*, p.85.)
 - (4) 運輸・一般労働組合の結成は一九二〇年八月一日各組合代表者会議で合同が論議され、同年十二月一日、十九組合代表者会議で合同投票に就いての討議を経て、一九二二年五月十一日、十四組合が合同し、一九二二年一月一日を以て新組合が発足しつつは「Transport & General Workers' Union, its Work and Problems, Part I, pp. 9-12.)
 - 一般都市労働者組合は一九二四年「三井炭組合——The national Union of General Workers) ガス労働者および一般労働者組合の後を、the Municipal Employees' Association, the National Amalgamated Union of Labour——の合同の結果結成された(The National Union of General and Municipal Workers, *Sixty Years*, p.2.)⁸
 - (5) Allen Flanders, *op. cit.*, p. 30.
 - (6) Transport & General Workers' Union, *op. cit.*, p. 3.
 - (7) 「ガス労働者および一般労働者組合」は一八八九年三月三十一日成立してゐる。「エック・波止場・河岸および一般労働者組合」の結成については本稿において述べる。
 - (8) George Junian Harney (1817-87, veteran Chartist) は「チャーチズムの全盛時代以来、重要さにおよび、関心の度におよび、私は一八八九年の大ストライキに比肩せられる運動はみたことがなく」と述べる(Eric J. Hobsbawm, *Labour's Turning Point, 1880-1900*, p.85.)⁹ A. L. Morton, *George Tate らを支持しつつは* (A. L. Morton, and George Tate, *The British Labour Movement, 1956*, p.192.)
- ホールは「一八八九年ないしその頃の労働組合運動は、一八三四年の崩壊以来始めて、あらゆる種類の肉体労働者に門戸を開いた運動になった」とするのは正しいと云ふ(G. D. H. Cole, *op. cit.*, p. 26.)⁷ フランダーズは「合同機械工組合の結成が前の時期における転換点となったと同じように、一八八九年のロンドン・ドック労働者のストライキの成功はこの組合発展の局面にともなつた信号、一〇の前兆となつた」と述べてゐる。(Allen Flanders, *op. cit.*, p.16.)⁸
- (9) Report on the strikes and lock-outs of 1889, by the Labour Correspondent to the Board of Trade, p.8.

一八八九年八月十三日から九月十四日にわたるロンドン・ドック・ストライキは、当時、ドック労働者の大部分のものが未熟練労働者として未組織者であつただけに、全然予想されなかつた事件であつた。それは『自然発生的ストライキ』として、「全く新奇な、あらゆる人々の予測をくつがえすもの」であつた。自然発生的性格の基因は直接的な問題よりも、むしろ長期にわたるドック労働者の労働生活の貧困の蓄積にあるとみななければならない。ドック労働者の依拠するロンドン港湾地区は『貧困のどぶ池』と称せられ、その仕事は『巨大な戸外救貧制度』であり、その労働者の生活は仕事を得た場合は漸く生きえられるだけの、仕事のない場合は半犯罪人階層としてのものである。いかに低いかはチャールス・ブースの調査の示すところである。ドック労働者生活の窮迫化の原因はどこに求めるべきであるか。ドック・ストライキを通じて一般組合の成立過程を考える前提として、ドック労働の問題点を明確化しておく必要がある。

その第一は雇傭の不規則性であり、第二は雇傭の劣悪条件（*working system*）、第三は低賃金にあると考えられる。雇傭の不規則性の実態はブースの調査（一八八八年）によって概観すれば下表のようである。

雇傭が不規則であるものは全体のほぼ三分二を示している。この

West and East India Docks

818 regularly employed

Average $\frac{1,311}{2,129}$ irregularly employed

London and St. Katherine Docks

1,070 regularly employed

Average $\frac{2,200}{3,270}$ irregularly employed

Millwall Docks

Contractors' permanent staff of labour300

Irregularly employed500
800

雇傭の不規則性は、ドック労働のうける自然的制約⁷⁾よりも主として経済的条件にもとづくものである。「ロンドン・ドックは競争産業の犠牲である」⁸⁾と論断するビートル・ス・ウェップの報告冒頭の指摘は正しい。十九世紀前半のドック会社の特権的経済地位は、前記 Millwall Docks (一八六八年) の最新設備を伴う創設、スエズ運河の開通 (一八六九年) による他港の勃興を契機に崩壊し、競争の激化となる。資本間の競争は一方においてドック会社の合同を生ぜしめると同時に他方において、労働者間の競争に転嫁せしめられた。すなわち、利潤確保のための企業の合理化は過剰労働力を排除し、他産業から排出される過剰労働力と合して老大な「臨時労働者の産業予備軍」を形成し、かかる大量の労働力供給源を創出することによって、ますます労働者間の競争を激化させ、規則的雇傭を不規則に、すなわち、常備労働を日傭労働に転化せしめ、且つ賃金ならびにその他労働諸条件の低劣化をはかったのである。かかる傾向は交通機関の改革、すなわち、帆船から汽船への転換によって促進された。それは自然的制約を二義的なものにして、むしろ投下資本の回転のためにドック労働の時間短縮を要求することになり、本来的に不規則性をもっていたドック労働をさらに一層不規則¹⁰⁾たらしめたのである。かくして、いわゆる「資本蓄積の絶対的法則」はロンドン・ドック労働に貫徹し、就役労働者に対比して大量の、窮乏化した常備的過剰人口の存在がみられた。この一般ドック労働者は、まさしく、相対的過剰人口の第三部類たる停滞的過剰人口であり「現役労働者軍の一部を形成しているが、しかしその就業は全く不規則である。かくしてそれは、資本に対し、自由にしうる労働力の汲めどもつきぬ貯蔵所を提供する。彼等の生活状態は労働階級の平均的な標準的水準以下に低下するのであって、他ならぬことは、彼等をして資本の独自の搾取部門の広汎な基礎たらしめる」¹¹⁾ものとみなければならぬ。

註(1) Allen Hutt, *British Trade Unionism*, p.38. (1962). G. D. H. Cole and Raymond Postgate, *The Common People*, (1949) p.

427. H. Llewellyn Smith and Vaughan Nash, *The Story of the Dockers' Strike*, (1889). p.28. 参照。

(2) Allen Hutt, op. cit., p. 38. 堀田正兵衛訳「四ヶ年」。

(3) Charles Booth, *Life and Labour on the People in London*, First Series; Poverty 4, (1902). p.30.

(4) Charles Booth, op. cit., pp. 30,31.

(5) ドック労働は大別して次の三つに分類できる。

(1) the unloading of vessels,

(2) the warehousing of their contents,

(3) the loading of outward-bound ships,

その労働者の種類も多様であるが、主なものをおげれば次のようになる。

(1) stevedore……船艀に貨物をつむという仕事の性格から特別の判断、熟練を必要とした。

(2) highman, waterman……一七七年の修練期を必要とする熟練工。

(3) sailors, firemen, coalporter,

(4) riggers, scrapers, ships' painters, engineers, ballast heavers, shipwright, 等。

(5) 荷揚、倉庫の仕事はすべて不熟練労働者。

(6) Charles Booth, op. cit., pp. 18, 19.

(7) East London Dockers' Union は the London and St. Katherine Docks (一八〇五年創設) the West and East India Docks the Mill-wall Docks (一八六八年創設) の三つである。

(8) H. Llewellyn Smith and Vaughan Nash, op. cit., p.45. 著者は経済的変動よりも季節的変動、風、潮の変化による労働の不規則性を重点をおくものであるが、これは誤りでなく。

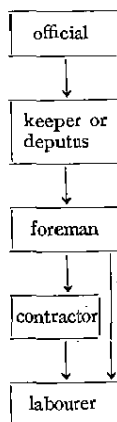
(9) Charles Booth, op. cit., p. 12.

(10) 不規則な労働に従事する一般ドック労働者数は、Tilletの上院委員会報告によれば、一万と算定され (Report on the strike.

and lock-outs of 1889, p.6.) この人数はブーンスの調査報告による人数と同一である。しかし、三千—一万五千人と算定して
る場合もある (Official Declaration of the Joint Committee, August 22nd, 1889, Smith and Nash, op. cit., p.183.) ち
雇傭されるのは平均三千人、約三分一にすぎない (Charles Booth, op. cit., p.25.)

- (10) 不規則性は就労の機会ならびに就労した場合の労働時間の二重の意味に解する必要がある。
(11) マルクス・資本論、長谷部訳第一巻第四分冊一六三ページ。

このように、一般的に不規則なドック労働者は、就労した場合どのような雇傭関係に編みこまれるのか。ドック
会社に直接雇傭される場合と、請負制度のもとに雇傭関係を結ぶ場合の二つに分けられる。ドック資本の労働力統
制関係の図式化を通じて、雇傭関係をみると次のようである。



しかし労働者の大部分は請負制度によって請負業者との間の雇傭関係に入る。この制度は一八六五年資本間の競争の結果導入されたものである。¹⁾ 純然たる下請制度はなかったけれども、部分的作業の転貸 (sub-letting) が組織的に行われ、この制度が賃金算定を不明確化し、ドック会社と一般ドック労働者との間に請負業者 (寄生者の存在によっていわゆる『sweating system』が厳存していたのである。この制度の廃止は懸案の事項であった。²⁾

雇傭の不安定、雇傭制度の劣悪な条件のもとで賃金も当然に前記二点の規定をうけて、不安定となり、低水準とならざるを得ない。問題の第三点賃金はどうかであるか。われわれはドック労働者を労働の規則性の視点からみたのであるが、この視点にたつて賃金をみると、まず規則的雇傭労働者は週給によって支払れ、少くとも二〇—二五³⁾志

である。その上層部の職長においては年平均週三三志^{シリシ}、特殊熟練工の沖仲仕においては三六志に及ぶ。規則的雇傭労働者（職長、監視労働者、常傭者）のうち職長は経営者の観点にたつて労働者に対し、明確に一般ドック労働者と隔絶した階層をなしていた。常傭労働者（Permanent man）は、賃金額において機械工その他の熟練工より低位にあり、絶對的にいわゆる労働貴族層に該当するものではないが、ドック産業の相対的低位を考え、一般ドック労働者の後述する賃金水準の劣悪、雇傭の不規則性に対比するとき格差は大きく、この常傭労働者を含めて、ドックの規則的雇傭労働者が、規則的賃金収入とその水準において『労働貴族』とみなしてよい。一方における停滯的失業者の存在、一方における労働貴族の存在を、ドック労働者をみる場合明確にしておかなければならない。さらに注意しなければならぬことは、これら労働貴族層が絶えざる一般ドック労働者の増大、ならびに資本からの二側面の圧迫をうけ、その特權的地位は必ずしも安定していなかったことである。

この層に対比される不規則的雇傭労働者（先取特權労働者、臨時労働者）ははるかに低額である。先取特權労働者は週一五志——一磅^{ポンド}であるが問題は一般ドック労働者の場合である。一八七二年の爭議によつて一日二志六片^{ペンス}は現行時間賃金五片になった（超過労働——六片^シ）。したがつて現行制度によれば一日の所得二志九片——四志三・二五片、平均額三志六片となり、不規則労働ということを度外視するならば週一磅となり、その限りでは問題はなかった。しかし、前述のとおり、その就労は極めて不安定であり、従つて賃金取得額も変動をうけ、平均週七志以下と述べられている。これはドック会社による直接雇傭の場合であつて、その殆んど多くが請負制度の雇傭にあり、この場合は時間当り六片が支給されていた。したがつて請負制度との不均衡は正のために時間給五片の上に、仕事量に応じた割増金が附加されていたのである。（この割増金が争議のさしあたりの係争点となった）。かくして、何れの場合にあつても賃

金は、就労の不規則性の故に、不規則雇傭労働者は過度に低く、世論もまたこれを認めていた。¹⁰⁾

註(1) Charles Booth, op. cit., p. 14, 参照。

- (2) 一八八〇年の争議は sweating system 廃止をめぐるもので、その結果 contract system の場合の賃金は時間六片となった (Charles Booth, op. cit., p. 21.)
- (3) 規則的雇傭労働者は企業によって階層を異る。West and East India Docks, London and St. Katherine Docks の場合次のようになる。

West and East India Docks

Foremen.....	457人
Police.....	114
Permanent labourers	247
regularly employed	818

London and St. Katherine Docks

Formen	400人
Police	100
Aritsans	150
Permanent labourers ...	420
regularly employed ...	1,070

- (Charles Booth, op. cit., p. 18.)
- (4) Charles Booth, op. cit., p. 24, H. Llewellyn Smith and Vaughan Nash, op. cit., p. 28, Report on the strikes and lock-outs of 1889, p. 7, 参照。
- (5) E. J. Hobsbawm は労働貴族の指標を (一)労働者所得の水準と規則性 (二)社会的安定のみこみ (三)職長及び親方によって取扱われた方法を含めてその労働諸条件 (四)彼の上下の社会的階層との関係 (五)一般的生活条件 (六)将来の昇進と子供について

の期待—において考え、特に第一点を重視している。そして、賃金がよくても賃金の不規則性、変動性のため、通常、労働貴族とみなされない労働者も、特定の場合、その仲間大衆と対比して労働貴族とみなす。例示としてロンドンの沖仲仕を一般ドック労働者との対比で指摘している。(Dona Tor, Democracy and the Labour Movement, E. I. Hobsbawm, The Labour Aristocracy in 19th Century Britain, p.202.) など、エドワード・モリス・ウォーレンは職長と常備労働者を“uppermen”と指摘し (Charles Booth, op. cit., p.25) モーネ・バスターフィールドはstevedoresとlightmenを貴族としてとらえている (G. D. H. Cole and Raymond Postgate, op. cit., p.428.) なども不十分である。前記 E. J. Hobsbawm の論拠によつてドック規則的雇傭労働者なかにstevedore, lightmen 4 種類熟練工をドック労働貴族とみなすべきである。

(6) 不規則雇傭労働者は先取特権労働者 (preference) と臨時労働者 (casual) に分れ、前者は雇傭に対し先取特権を与えられてくるもの、Royals, Ticketman ともいわれることがある。不規則雇傭労働者に属しながら、常備労働者と臨時労働者との中間的存在で、この特権は規則止し、出勤と正直によつて雇主の信用をえたものである (Charles Booth, op. cit., p.26.) 参照。

(7) Charles Booth, op. cit., p.14.

(8) Charles Booth, op. cit., p.21.

(9) Report on the strikes and lock-outs of 1889, p.7. ただし週七志以下というのは Tillet が上院委員会に報告したもので、政治的配慮があると思われる。しかし、一般ドック労働者数の約三分一が就労の機会をもつと算定すれば、上記賃金額は甚しく現実の額と相異なるものとは考えられなく。

(10) Report on the strikes and lock-outs of 1889, p.7. 参照。

十九世紀後半のドック産業部門の発展は、一般ドック労働を雇傭の不安定性、収奪と圧迫の sweating system、著しい賃金水準の低位で特徴づけ、一般ドック労働者を部分的失業ならしめた。しかも、彼らは、イギリス産業資本の資本蓄積の法則によつて生みだされる絶えざる失業人口の増大からの圧迫をもうけ、この二重性の故にますます低落の傾向を示したのである。一方における停滞的過剰人口として窮迫化する一般ドック労働者の存在。他方、

益対的観点の上にたつて、規則的常備労働者は明かに『労働貴族』としての地位を保有してきた。このドック労働者の階層分化は労働者の組織上にも反映している。すなわち、前者の未組織状態¹⁾、後者の職能別組合 (craftunion) の存在である。

一八七〇年代のイギリス経済のいわゆる大不況 (Great Depression) による失業の増大はドック労働者の低落を強化させずにはおかない。ドック『労働貴族層』もまた影響をうけ、その特権的地位を喪失しはじめ、規則的常備労働から不規則的雇傭労働 (permanentman preferredman casualman) に、いわゆる労働力下降の傾向が促進せしめられた。もとより彼らが前記の労働諸問題を明確に認識していたわけではなく、生活体験から、ただ資本の『不正』 (injustice) という漠然とした対立意識を強めつつあった。

以上述べた条件のもとで、「動物にもっとも近かった人間たるものうち、もっとも圧迫され、不幸な人々が、いままやその人間性を回復し、その諸権利を要求した」²⁾ ロンドン・ドック・ストライキが生じたのであり、その自然発生的といわれる基因もこれらの点にあるとみなければならぬ。

註(1) 一般ドック労働者の殆んど大部分は未組織で、漸く一八八七年 Ben Tillet により新組合として the Operative and Labourers' Union が結成された。組合員は三〇〇—二、五〇〇人の間を変動した。(Webb, The History of Trade Unionism, 1920, p. 408, 参照。) 彼らの組織化、困難の理由はその階層、職業の多様性にありといわれている (Smith and Nash, op. cit., p. 26.)

(2) the Seamen's and Firemen's Union, What-labourers' Union, Amalgamated Stevedores, United Stevedores 等々も。

(3) H. Llewellyn Smith and Vaughan Nash, op. cit., p. 30.

(4) G. D. H. Cole and Raymond Postgate, cit., p. 426.

三

ドック・ストは一八八九年八月十三日から九月十四日に至るものであるが、この期間は三段階に区分できる。第一期は八月十六日に至る初期の段階である。第二期は八月二十七日までの長期闘争態勢をとり、一般ドック労働者の組織化、熟練工との統一戦線の形成の（「一般労働組合の成立」段階である。第三期は八月二十八日から九月十四日の妥結に至るまでのスト終結過程の段階である。この区分によって考察を加える。

【第一期】（八月十三日—八月十七日）

ドック・ストライキの勃発について、スミスとナッシュは次のように記述している。¹⁾『新聞読者の聞いたことは八月のある水曜日（争議勃発は八月十二日で月曜日にあたり、水曜日はあやまりである。ストライキに入つたのは翌十三日午後からである。—前川）二三人の労働者が南・西インド・ドックで仕事を拒否したこと、いろいろなアジテーターの呼びかけていくつかの会合がひらかれつつあること、運動はひろがりつつあること、……だけであつた』。当初の事件そのものは自然発生的なものであつたが、すでに述べた長年にわたる諸問題の堆積から当然に拡大するだけの条件があつた。また、このドック・ストライキ自体がその典型的なものであるが、『新組合運動』が八五年以降すでに展開され、特にドック・ストライキの直前に行われた未組織者の運動、すなわち、ロンドン・マッチャ女工の争議（一八八八年五月）ロンドン・ガス労働者の運動（一八八九年五月）の成功は彼らに闘いの確信を与え運動拡大の条件になつてゐた。

すでにドック労働者の組織活動に参加してゐたテイレット(B. Tilt)およびバーンス(J. Burns)が争議を指導

し、さらにトム・マン (T. Mann) が直ちに加わった。大衆はこれらの指導者を信頼していた。⁴⁾ 争議は翌八月十三日よりただちにストライキとなった(当日スト参加者二千五百人)。

争議勃発当初の要求は、一時間六片の支払と最低雇傭四時間であったが、ストライキに入ったときの正式文書による要求項目は次のようである。⁵⁾

- 一 採用の外來労働者は四時間以下の雇傭、賃金支払で解職されざること。
- 二 労働者の雇傭は二定時刻すなわち毎日八時と十二時になさるべきこと。
- 三 出来高仕事は全制度を通じて廃止されるべきこと。
- 四 最低賃金は時間五片から六片に、超過時間は六片から八片に増額されるべきこと。
- 五 請負制度の支払は時間八片に、超過時間は時間一志に増額されるべきこと。

この要求をみると、すでに前に述べたドック労働の諸問題がある程度整理されて提起されているのを知る。

この要求書に対する返答を労働者はデモ行進(二万人参加)でもって迎えたが、結果は賃金増額拒否をふくみ、労働者にとっては不満足なものであった⁶⁾(八月十六日)。この間、戦線は他のドック、渡止場、倉庫に拡大されたが、なお地域的に限定されていたし、運動それ自体に明確な方針がうちたてられてはいなかった。しかし指導者の熱意にこたえて大衆は長期の闘いを決意した。この決意ができた背後に世論のドック労働者に対する支持があったことは注意されなくてはならない。⁷⁾ かくして第一期は終る。

註(1) H. Llewellyn Smith and Vaughan Nash, *The Story of the Dockers' Strike*, (1890) pp.28, 29.

(2) ドック労働者二三人の労働拒否は自然発生的なものである。合同委員会の公式宣言は、ストは準備されていたと述べているが (Official Declaration of the Joint Committee August 22nd 1890) このようには考えられない。ただストライキが手段とし

て考えられていたことはいえよう。スミスもこれは認めている (Smith and Nash, op. cit., p. 32.) 参照。

- (3) ロンドン・マツチ女工、ガス労働者はただ、ドック労働者と同じ未組織者であるというだけでなく、その多くはドック労働者の妻・子女であり、後者は剛愎であった。というのは冬はガス労働者に、夏はドック労働者となる場合が多かったからである (A. L. Morton and G. Tate, *The British Labour Movement*, (1956) p.191, 参照)。また、ガス労働者の組織化はかなり新聞を通じてよく知られていた (E. J. Hobsbawm, *History in the Making*, p.79, 参照)。したがって、それらがドック労働者運動の刺激となった。

- (4) タイレットは茶運搬夫組合の書記であり、すでにドック労働者と関係が深く、バーンズ・マンとともにガス労働者の運動を指導して成功した直後であり、大衆との間は親密であったため。

- (5) Report on the strikes and lock-outs of 1889, by the Labour Correspondent of the Board of Trade. (1890), p.7.

- (6) Smith and Nash, op. cit., p.37. 参照。

- (7) フースの調査、雑誌諸論文によってドック労働の実態はすでに知られていた。また上院委員会はドック労働の弊害除去をすでに勧告していた。(Report on the strikes and lock-outs of 1889, pp. 6, 7, 参照)。

【第二期】(八月十八日——八月二十七日)

この時期はドック労働者の組織化の段階であつて、熟練工と不熟練工(一般ドック労働者)の統一戦線の形成過程、一般組合の成立過程としてとくに重要である。ストライキ自体としては財政的救援活動に努力を集中した段階である。

ドック労働者の労働貴族層としてあらゆる点で特権的地位を保有していた熟練工はどのような態度をとったのであろうか。彼らは不熟練労働者のこのストライキに同情を示し、財政的援助を行った。これが前半期における彼らの態度であり、十八日に発表された合同沖仲仕組合の宣言はもっともそれを示している。宣言はいう。¹⁾

『ドック労働者の状態を知っているわれわれロンドン沖仲仕組合は、力の範囲内であらゆる合法的手段で彼らの運動を支持することに決定した。それ故、われわれはストライキにあるドック労働者の代りとなるスト破りを雇うドック会社の仕事を拒否した。これを行ったのはわれわれの闘いが彼らと一緒に、同様仲介業者や船主あるいは親方沖仲仕への不信頼のためではなくて、われわれよりも貧しい仲間を支援することは義務と感じるからである。……』(傍点筆者)

同情の限りにおいては実質的統一戦線は不可能である。それだけが自らの要求を提起し、その部分的要求を全体的要求に高めることによって、統一戦線は形成され、統一闘争は可能になる。このドック・ストライキの熟練工と不熟練工の場合も例外ではない。「舩船頭・沖仲士・穀物および材木運搬夫および常備労働者すべてがいわゆる同情から臨時労働者のために運動に加わったが、やがて別に彼ら自身のため要求を定式化した」²⁾のである。かくして第一期につくられたテイレットによるストライキ委員会(不熟練労働者を基盤)とトーニー(James Toomey: Chairman Amal Earnotes Stevedores' Committee)(熟練労働者を基盤)による両ストライキ委員会は合同し、統一ドック労働者ストライキ委員会が形成された。前記宣言の段階では熟練工の組合は不熟練労働者と一線を劃してただ同情的支援であつた。これは旧組合のもつ労働貴族性ニセクシヨナリズムの表現でもある。しかし現実是不熟練労働者の問題に限られてはいず、彼ら自身下降の傾向がみられ、その特権性は喪失しはじめていた。したがって熟練工自身、自らの労働諸条件を防御するために不熟練労働者と統一行動をとり(集会、行進への参加など)さらに自らの要求を不熟練労働者の要求との関連で提起した。かかる熟練工と不熟練労働者との下部での戦線拡大の動きが指導部の統一(「統一ドック労働者ストライキ委員会」)に結実したと考える。第二期末の統一の強化は同じ熟練工、舩人夫の次の決

議) (八月二十七日) によって明確化されている。

「すべての艀船頭は労働者の正しい要求にドック会社が譲歩するまで仕事から引上げねばならない、このことが現在の闘いで重要である」

以上のような大衆自身の統一への強化過程のなかで、特に撓ゆまざるテイレット、バーンズら指導者の努力によって、ドック労働者の一般組合がつくられた。八月十九日、東インド・ドック門前の集会で組合結成が指導者より発表され、その後の戦線の拡大はまた組合組織の拡大を意味するものでもあった。

組織拡大の一面、救援活動の効果的運営が伴われねばならなかった。闘争の第一週で従来の組合基金はなくなり、第二週以後は援助金によって支弁された。一日、二万五千チケット(一チケット二片)の発行は、ついに財政的危機を招き、組織面での輝かしい成果と同時に財政的危機の深化(ドック労働者生活の困窮化)をもって第二期を終ったわけである。

註(1) Smith and Nash, op. cit., p.125.

(2) Report on the strikes and lock-outs of 1889, p.7. なお熟練工自身の要求を例示すると、沖仲士―朝七時から夕五時まで時間八片、超過時間、時間一志、穀物運搬夫―百クォーター当り十五志三片を要求(Smith and Nash, op. cit., p.181. 参照)。

(3) Smith and Nash, op. cit., p.63. 統一エック労働者ストライキ委員会は Wade's Arms に本部がなかれ、委員には次の組合から代表がなされた。“National Amalgamated Sailors' and Firemen's Union” “Amalgamated Stevedores” “United Stevedores” “East London Painters' Trade Union” “Tea Operatives Association” (Smith and Nash, op. cit., pp. 63, 177. 参照)。

(4) Smith and Nash, op. cit., p.66.

(5) G. D. H. Cole and Raymond Postgate, op. cit., p.428. 参照。

(6) Smith and Nash, op. cit., pp. 92-100. 参照。

(7) 統一ドック労働者ストライキ委員会は八月二十六日次のように宣言している。『われわれは基金を——それは惜気なく義捐されているが——世間に訴えている。しかし一ペニーといえども、委員会が許可なくストライキをやっているものには、どの職業のものであれ支拂われなくてはならぬ』(Manifesto of United Dock Labourers' Strike Committee, August 26th)

【第三期】(八月二十八日——九月十四日)

この時期は財政的危機が、闊いへの強い意志と労働階級の國際的連けいによって克服され、ついにドック資本をして護歩せしめた終結の段階である。この期の当初、労資の交渉がもたれたが、いわゆる『ドック労働者の六ペンス』(“tanner”)については双方譲らず決裂に終った¹⁾。ストライキ委員会は部分的妥協をいれず、財政的考慮からただちに救援停止を行って、さらに闘争継続を決意した。『ドック労働者は飢えている。しかし降伏するな²⁾。これは九月一日に發表された宣言の結びである。

組合の圧力、与論を背景に、マニング僧正(Cardinal Manning)バクストン(Mr. Buxton)トラセイ卿(Lord Buxton)によって、翌年一月一日より増額の調停案が出されたのである。指導者の条件付受諾(五片が六片になるという了解)に対し、一般労働者は反対した。なぜならドック労働者にとって一月までまつということは四月までまつことを意味したからである(冬期には仕事がない)。調停は停滯し、ただマニング僧正が代案として十一月案を提起した。まさにこの時に(九月九月)オーストラリヤからの多額の義捐金が到着したのである。³⁾労働者は二八対一四票で十一月案を受諾、ドック会社もこれを受諾、最終的に九月十四日ストライキは妥結した。⁴⁾その要点は七項目、次のようである。⁵⁾

- 一 十一月四日以降時間当り五片を六片に、超過時間は八片に増額。
- 二 午後の特別短時間雇傭は除いて支払二志を下らざること。

三 十一月四日以降請負仕事は出来高仕事に代える。その場合時間六片を下らざること。超過時間は八片。

四 超過勤務時間は午後六時から午前六時までとす。

五 ストライキを終り職場復帰すること。

六 ストライキ参加者、その指導者はストライキ中仕事したすべての労働者がストライキ参加者によつて脅迫されず、仲間として取扱かわれるよう配慮すること。

七 ストライキ終了後の新奇雇傭者に対し、会社は今後ストライキ参加者、不参加者の区別をせず、またストライキ参加者に直接、間接的に怨恨を示さない。

九月十六日妥結後、最後の示威運動が行われた。「それは闘いのデモンストレーションというよりむしろピクニックであつた」といわれている。かくしてロンドン・ドック・ストライキは終了した。

ドック・ストライキの成功は第一にドック労働者の強い意志にもとづく団結、第二に指導者と大衆の密切な結合、第三に熟練労働者と不熟練労働者（旧組合主義者と新組合主義者）の統一、第四に労働者の国際的提携、すなわち全体としての労働階級の団結がドック会社のそれにまさった点にもとづくものと断じてよいであらう。

註(1) 波止場主は妥協案（最初の四時間六片、ただし一日九時

間四志、超過労働八片）を示したが、ドック会社は六片を頑強に拒否、ここに彼らの間で若干の分裂がみられた（八月二十八日）。

(2) Smith and Nash, op. cit., p. 179.

(3) オーストラリアの労働者が連帯性を示したのは純粹の自発的同情であつた。(Daily News) が第一週目より日ストライキを報じていた。ストライキ基金の収支は下のよう

	£	s.	d.
支出	42,999	12	2
収入	46,499	12	2
内 訳			
一般社会の募金	10,661	1	10
一般街頭募金	1,039	13	3
附興行	31	17	4
イギリス組合	4,234	10	2
フランス	6	18	11
ベルギー	21	10	4
ベルリン	51	5	0
アメリカ	29	0	9
植民地	30,423	15	0

〔植民地の殆んどすべてがオーストラリア〕

等。

- (4) Smith and Nash, op. cit., pp. 150-1. 参照。
 (5) Report on the strikes and lock-outs of 1889, p. 9.
 (6) Smith and Nash, op. cit., p. 156.
 (7) ロンドン・ドック・ストライキの全斗争過程は次の通りである。(Smith and Nash, op. cit., Report on the strikes and lock-outs of 1889.) G. D. H. Cole and R. Postgate, op. cit., より作製。

八月	【第一期】	南西インド・ドックで争	二十日	ロンドン港閉鎖。	三十日	ノー・ワーク宣言を発表。	声明。
【十二日】	議勃発。			ロンドン港、財政委員をたすよう各部に説得。	九月	ノー・ワーク宣言の撤回宣言発表。	
十三日	午前要求書提出、午後スト突入(参加者二、五〇〇人)		二十二日	交渉、会社側賃上、請負制度廃止要求を拒否。	六日	調停案提示(一月一日以降賃上げ)	
十六日	ロンドン市中行進(参加者一万人)。				七日	シドニー大集会。	
	仲仲士組合参加を決定。		二十六日	統一ドック労働者ストライキ委員会、許可なしのスト参加者に支払停止の声明発表。	九日	指導者調停案受諾の意向を示すも大衆は反対。	
【第二期】				テイレットの説得によりティルバリ労働者作業中止。	十日	オーストラリアから義捐金到着。	
十七日	仲仲士十九日の就労中止を決定。		二十七日	舢舨頭決議。	十二日	ストライキ委員、調停委員と協議。	
	仲仲士組合ストライキ支持の宣言発表。				十四日	調停委員、会社側と協議。	
十八日	各所で集会、熟練工も参加。		【第三期】	波止場主譲歩を示すも労資交渉ならず。	【十六日】	午前、労資交渉。午後妥結。	
	トム・マカーシー(仲仲士組合書記長)労働者に組合加入を宣伝。		二十八日			【勝利の行進】	
十九日	東インドドック前にて組合結		二十九日	ストライキ委員会、ゼネスト呼がかけを決定。救援停止を	(以上)		

四

一八八九年のドック・ストライキは、まさしく「就業者と失業者との間のあらゆる連絡は、かの法則のハ雷給律」の『純粹な』作用を擾亂する¹⁾ことを示すものとみてよく、前述の妥結要項からも明かなように、多くの労働条件の改善を獲得するものであった。と同時に、ストライキ第二期に集中的にあらわれているが、全期間を通じて一般ドック労働者組織化の過程であって、闘争に導かれて一般組合が成立していったのである。すなわち、従来の「茶運搬夫組合」(Tea Operative and General Labourers' Union)を中核として、新しく「ドック・波止場・河岸および一般労働者組合」(the Dock, Wharf, Riverside and General Labourers' Union of Great Britain and Ireland)が結成されたわけである。これにならって数多くの新組合がつくられた。²⁾

新しく成立した一般労働者組合はどのようなものであったか、その目的、機構、運営について考察を加えたい。組合の目的とするところは (一) 少年労働制度の統制 (二) 現行下請制度の廃止 (三) 雇傭時間の規則化 (四) 最低四時間雇傭の実施 (五) 職業利益の防衛、災害補償権利回復、ストライキ中組合員に対する週十志支給の準備のための中央基金の確立 (六) 臨時労働ならびに超過労働の廃止 (七) 労働者登録制の確立である。³⁾ 特に第七項は重要であって、組合員証が仕事継続の基本的保障となり、組合の基礎となったのである。第五項、ストライキにそなえての基金の確立の重視は新組合としての、この一般労働者組合の特徴であった。

機構は支部 (Branch)、地区委員会 (District Committee)、支部代表によって構成、代表者協議会 (Delegates' Council) 各支部代表二名で構成、中央執行委員九名の任命権をもつ、執行委員会 (組合長ハートム・マン、書記長ハーティレット、財政

務委員、その他役員」となっていた。⁴⁾

組合財政は加入金二志六片、組合費週二片他に一季毎に運営費として四片という低額であった。⁵⁾

すでに述べたとおり、組合員証を雇傭確保の重要な条件たらしめたことは、組合の組織拡大の点で特に有利であった。組合は不熟練労働者に限らず、労働者の階層においても産業部門においても、広く門戸を開放し（職長すら加入したのもあったが、多くは別個の組織に加入した）、十一月末には組合員三万と算定されている。⁶⁾一般の他産業未組織労働者の側においても、彼らの利益を防衛する機関として、この設立されたドックの一般組合とガス労働者の一般組合に依拠しようとしていた事情も加わり急速な拡大がみられた。

ところで、この一般労働者組合の基本的性格は旧組合主義との関係においてどのように理解すべきであろうか。

当時の官庁報告は「この組合ハドックの一般労働者組合Vは、原則上、以前の多くの組合と決して異ならない。『新組合主義』として、また、従来の他の組合と本質上全く異なるものとしていわれなければならないのか、その理由をみることは難しい」と相異性でなく、むしろ類似性を主張している。これに対して、結成当時、その書記長は「われわれはただ一つの手当をもつ。それはストライキ手当である。私は疾病、失業ならびに多くの他の手当をもっているとは信じていない」と述べている。前記組合目的第五項を、前者は形式的に解釈し、後者は実質的な点を強調して述べたものと考えてよいであろう。

労働組合の原則的な点の一つ、すなわち、組合が労働者の賃金ならびに諸条件を改善する場合、組合が自ら「労働力市場における労働力の需給調整」を行うことによってそれを追求していくという点では、一般労働者組合も従来と異ならない。しかし、旧組合はこれを熟練工のセクショナリズムの上に立つて行ったに対し、一般労働者組合が

不熟練労働者を主とした全労働階級の観点に立った点は異っている。この相異は決定的に重要である。しかし判断の基準は、その後この組合が現実にとのよう運営され、機能していったかに主眼点をおかねばならない。「運動は——とエンゲルスは書いている——形式的には最初はトレード・ユニオンの運動だが古いトレード・ユニオン熟練労働者労働貴族のそれとは全然異っている。この人人は現在全く異った方法で孜孜として努力し、遙かに龐大な大衆を闘争にひき入れ、遙かに深甚に社会を震撼し、遙かに進歩的な要求即ち八時間労働制、一切の組織の総連合、完全なる連帯をかかげている」⁹⁾

ロンドン・ストライキ以後、八九年末までにドック労働者は十二件の争議を行ってゐる点からもその戦闘的性格を認めざるをえないであろう。しかし一面、まもなく葬儀手当を支給し、また多くの支部が疾病手当を設けているのである。¹¹⁾『共済手当に煩わされない不熟練労働者の攻勢的職業団体』の基礎の上に旧組合主義機能の一部を付加して、日常的性格をさらに強めざるをえなかった。当時の組合について「新しいより戦闘的様相を労働組合運動にもちこんだ。それらは友愛組合手当より労働組合の諸目的を強調した」¹³⁾(傍点筆者)と当時の一般組合の性格を現在の運輸・一般組合が述べてゐるのは妥当であろう。

註(1) マルクス・資本論、長谷部訳第一巻第四分冊一五八ページ。

(2) ロンドン・ドック・ストライキを契機につくられた新組合は次のようである。

the Dock, Wharf, Riverside and General Workers' Union, the National Union of Dock, Riverside and General Workers, the National Amalgamated Union of Labour, the Amalgamated Carters, Lorrymen and Mortmen's Union, the Amalgamated Society of Gas, Municipal and General Workers, the National Amalgamated Labourers' Union, the Amalgamated Tannway and Vehicle Workers' Association, etc.

- (3) Report on the strikes and lock-outs of 1889, p.10. 参照。
- (4) Smith and Nash, op. cit., p.160.
- (5) Smith and Nash, op. cit., p. 160. Report on the strikes and lock-outs of 1889, p.11. 参照。
- (6) Smith and Nash, op. cit., p.161. 参照。
- (7) Report on the strikes and lock-outs of 1889, p.11.
- (8) Henry H. Slesser, Trade Unionism, p.40.
- (9) エンダース、一八八九年十二月七日、ヘルツ宛書簡。
- (10) Report on the strikes and lock-outs of 1889, appendix table 1 参照。
- (11) Sidney and Beatrice Webb, The History of Trade Unionism, p.420.
- (12) Sidney and Beatrice Webb, op. cit., p.414.
- (13) Transport & General Workers' Union, The Union, its Work and Problems, part 1, p. 4.

五

一般労働組合の成立は資本主義が独占資本主義に移行し、資本蓄積の法則によつて相対的過剰人口を大量に生み出したときである。ドックの一般労働組合は停滯的失業者であるドック不熟練労働者の広汎な存在を前提に形成されたものであった。もとより一般労働組合は一産業乃至広汎な諸産業にわたる不熟練労働者の組織体であるが、成立にあつては、特定業種の不熟練労働者の労働力市場の存在が前提となり、それを中核として広く組織されていたことが注目されなければならない。

ドックの一般労働組合は、すでに明かなように、一八八九年のストライキという闘争過程を通じて成立していっ

た。闘争Ⅱ組織化の深い連関性が明示される場所である。その闘争は不熟練労働者に主体があった。彼らが旧組合の限界を克服しようとして新しい組合組織、機能を現実化した。と同時に、適確な指導の必要性が強調されなければならぬ。深い人間的信頼の上にたつて大衆と指導者は結合していた。指導者は当時生れた新しい社会理念にもとづき、対資本の闘いと、財政を含めた実務的活動の二側面において適確な指導を与え、大衆組織化活動に十分な効果を示すことができたのである。

ロンドン・ドック・ストライキを中心にドック労働者の一般組合の成立過程をみたわけであるが、このように成立した一般労働組合の多くが、二三年後には消滅し、他方、運輸・一般労働組合、一般都市労働者組合が現在のイギリス労働組合界で優位を占めているという事態は、一般労働組合の成立後の問題として、当然にあらためて検討されなければならない課題である。